

## 豚の抗酸菌症について (非結核性/非定型抗酸菌症)

と畜検査で行われる解体後の検査で、内臓が廃棄となる原因には様々ありますが、豚では抗酸菌症がその原因の多くを占めており、平成24年度も内臓が全て廃棄となった原因のトップは抗酸菌症でした。

### 抗酸菌症とは？

正確には、“非結核性（非定型）抗酸菌症”といい、世界中の土壌や河川などに広く存在している非結核性抗酸菌という細菌を原因とする病気です。

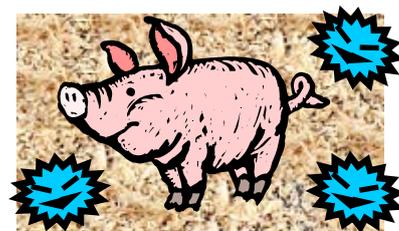


### 感染の原因は？

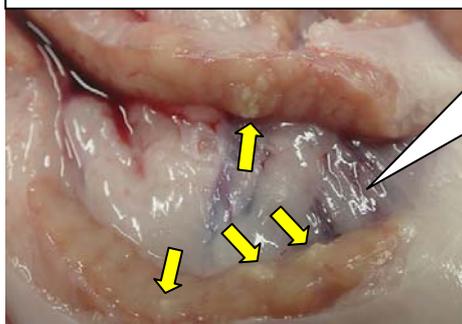
主にこの細菌に汚染されたオガクズ敷料や感染豚の糞で、それらを豚が口から摂取することで感染します。農場により発生頻度に差があり、オガクズ使用農家に多発する傾向があります。

### 症状は？

豚が生前に症状を示すことは少なく、まれに全身感染による発育不良となることもあります。大部分はと畜検査時の発見になります。



と畜検査時に最もよくみられるリンパ節（腸間膜リンパ節）の病変



リンパ節の断面にチーズのような白いブツブツした病変が見られます。このような豚の内臓は全て廃棄となります。



重度の感染を起こすと、このように肝臓（レバー）にも病変が現れます。

### ポイント

豚の抗酸菌症は特定農場に多発する傾向にあり、豚自体には症状が出ない場合でも、と畜検査で全ての内臓が廃棄となり、経済的損失が大きい病気です。

また、全身感染し敗血症となった場合には、枝肉も含めて全部廃棄処分となることもあります。

予防のワクチンはありませんが、汚染オガクズの使用を避ける、汚染豚のオールアウト、畜舎の消毒などの策を講じることが、抗酸菌症のまん延を防ぐ上で大切です。



福岡市食肉衛生検査所 〒812-0055 福岡市東区東浜 2-85-14

TEL092-651-3404 FAX092-651-9015